

和語一言

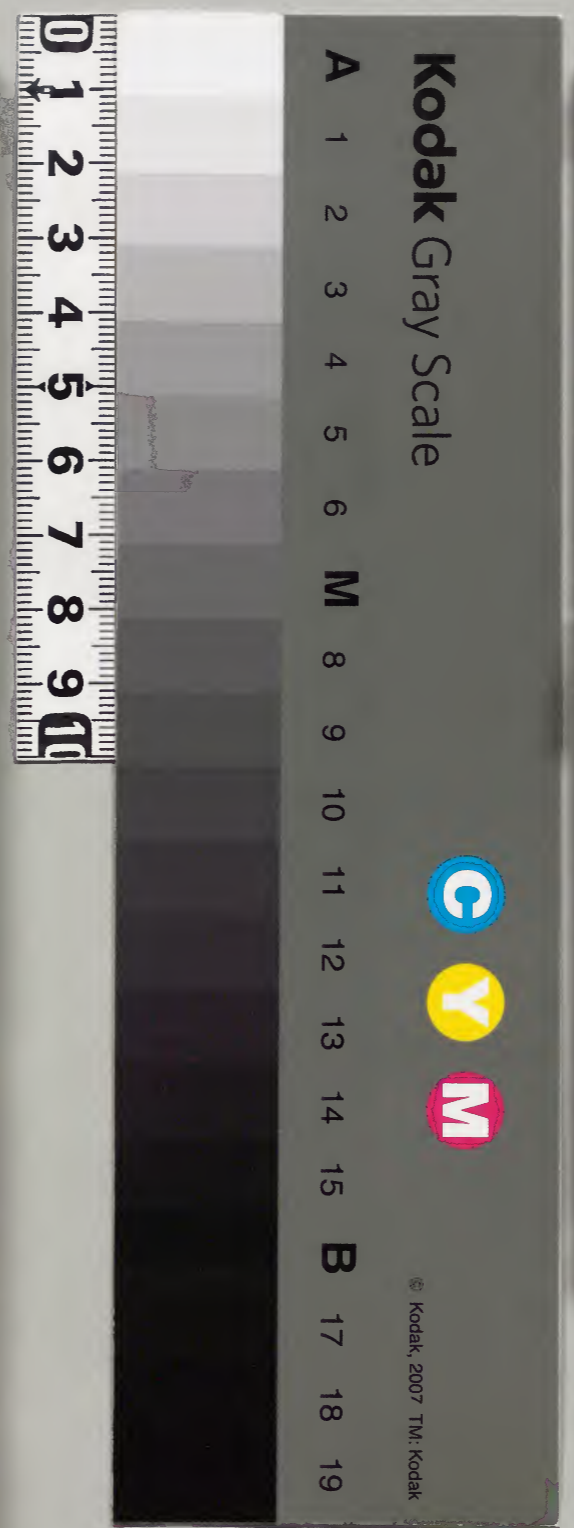
附録

二

太政官文庫			
		一	和
		二	
		四	書
一	九		
〇	二	八	
冊	架	函	跡
			門

内閣文庫			
		一	和
		二	
		四	書
一	九		
〇	二	八	
冊	架	函	跡
			類

内閣文庫	
番號	和 11498
冊數	80 (79)
函號	212 275



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



教部省  
文庫印

一 漢言附錄卷之四

目錄

舊託抄書

一 松園清介卷人之間之書

一味線由本

一 衞校本石奉行支配突頭人之由緒書

一 道高丈吉由緒書

源美成編

南  
文庫

一 鑑林明珍家譜并巧拙之評

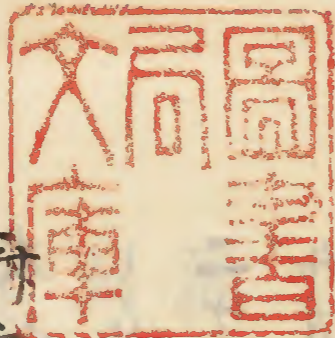
一 松原助由緒書

僧銜敵考

内一二七八五號

文鳳  
堂印





一活一言附録巻の二

相ヶ鎌倉松園山東慶寺

舊記抄言

河家宗五山派松名山東慶寺の弘安八年

北条貞時の建立とて山志は大和南

北条守宗の宗秋田藩の御宗の女北条

お後らら付の母に十村弘安七年四月日

子に生れしと辛す以て二十年後

錦山田屋山佛光園作へて宗子にて分

子とありし宗子に弘安八年の女子より利益

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '目録' (Index) and '一活一言'.







下山侍女元之妻能治中掛及出入仕女等年一古  
社所より永井伊守を孫へ所成り交り合ふ事  
楽交寺法を不存元之妻は侍りて其出先  
ふ東国より老方より其子の如く仕向は親丈夫  
東交寺法を不存元之妻は侍りて其出先  
之故に仕向は親丈夫  
中出侍りて其出先

松園山住持次男

宗山 湖音院是山志道大和尙  
才二世 務海堂大和尙  
口二世 法沢大和尙

向二世 順宗大和尙  
口二世 用堂大和尙  
後醍醐帝嫡女南山并維摩受具意永之石子  
年八月分已刻示寂是下り以来所祈と號  
寺入寺の女二十二月也限り

口六世 果庵了及大和尙  
口七世 仁芳美大和尙  
口八世 同宗擇大和尙  
口九世 相室杉大和尙  
口十世 意洞大和尙  
口十一世 相徳堂大和尙



門十二世 柏室樹大和為  
 門十三世 吳彦整大和為  
 門十四世 用璋又大和為  
 門十五世 明玄遠大和為  
 門十六世 渭繼澄大和為  
 門十七世 旭山賜大和為  
 生實師所八正從孫美明之身女弘後之丁巳七  
 月十、示寂  
 門十八世 隈山祥大和為  
 門十九世 瓊山清大和為  
 大友房督深光純の身女

門二十、 天秀崇大和為  
 台徳院様の所孫姫君正二位大友長尊長孫長秀  
 彩之姫君元和元年入高直山莊條 正徳二年二  
 月七日示寂 寺於永石上雲之石八寸文所穿し海を  
 横向不入流後回役免許し所年下下至古斗  
 才ノ末方解跡不々々 寺社以てより一進進し一併  
 度棟札に之通

大檀那征夷大將軍大政大臣從一從孫深光  
 秀乃大友師身女 天壽寺酒殿師建三  
 中書四者之  
 位持國東公方大友房督深光純身女



法清和尚

寸子右大位正二經卷九卷九卷九卷九

法崇為主 中寄進之

常大樹片乳母妻り局所執持者

維時寛永土甲戌年吉日

大工金子右左衛門卜者

戸正、永山某大和為

若連川深等屋一自女富永元丁亥年六月示

寂天秀大和為遷化後如所度海珠永福新

寺役人海迎之今う有等遠之若連川永島女

位持子中法支子一古法古例子遠一 大奥一清

年礼所代等所従義中上長時正所叙所役人と  
以所代等、礼終上如未信

一清代、様 所地界、高東支子及代、所居所

納経所礼如初所施如所載仕大施如志心

東巡大位屋様 有徳屋様

台徳屋様 懐信屋様

大蘇屋様 後明屋様

岩多屋様 孝恭屋様

常憲屋様

文昭屋様

方章屋様

為牌奉安置也



一慶有隆様御座癒之節と仰祈移中上  
御礼致上時殿御座癒之節涼軒臺秀西堂  
一天秀大和為年季之節御座癒之節  
御文通方々々

一文化十年十一月豫念田是ち口方より出たて  
衣の之介乾燒結之付事取上之也御座癒之節  
二十枚より五趾方仕在り

豫念田是山

東芝寺院代

涼軒

文政十年六月廿日おま刺り申上り候事  
何れ

### 相州鎌倉松園山東慶寺舊記抜書

未年御時任 御任櫻の所仕仕候事  
讀み下 秀安及子方仕候事

御 二ニニトヤル

公方様右大位二位まで在りて  
左大位下位也と云ふ事より  
是くト相中におおはる事  
右よりありしに於て  
御ニニクワイト申候







東照宮様慶長元年内大長小長任同八年小長  
征夷大將軍に補せらるるゆゑ大長小長任しりし事  
の由 左大長小長任の由は清上洛有りと申す  
なり 此より一向に仕る 大猷院様所入洛の  
時左大長小長任の由は左大長小長任の由申すなり  
左一位の上正一位小長と申すは  
左一位と極度と申すは左大長小長任の由申すなり  
又贈位して現在の人任しりし事今に申すは  
右大將様内大長小長任しりし事と左大將小長任  
の事と申すは  
左大長小長任の由と申すは 左大長小長任の由申すなり

此より左大長小長任の事と申すは 左大長小長任の由申すなり  
左大長小長任の由申すは  
東照宮様天正十三年右大長小長任しりし事  
左大長小長任しりし事 十六年左大將と稱しりし事  
と御任掬子の事と申すは 御例と申すは 申すは  
此より御受職の後右大長小長任の由申すは 右大  
長小長任の由申すは 右大長小長任の由申すは  
らせらるる事と申すは 申すは 申すは 大納言  
の時左大長小長任の由申すは 申すは 申すは  
と申すは 右大長小長任の由申すは 申すは 申すは  
御臺様御位階の由申すは 二位と申すは 申すは  
十



のや一位よりあつてせられぬや何と申す

従二位より女力申すは 桂昌院様三年

天英院様三年 従三位より直一位より女叙の計片

例より考ゆるとけなも一位より女叙の事といはるへ

くト御加階又御加級といふ事

御簾中様は四位の事といはる

従三位より叙せらるへい御叙位と申す

女位は三位より二位にきりし事あり

南州は四位より三位にきりし事あり

さらぬ事ハ平家二位より三位の事と申す

なるは持国の政事ハ従二位より叙せられぬ事と云

いふ事ありし 御任櫻の後何と申す

内府様と称しはる事あり

御簾中様と何と称しはる事あり

善寺基様 又西の御基様の事あり

三公と申すはと京都の大臣よりあつれぬ事

御家の友位ハ御家の御友といふ事あり

芝老十七御条より序を公家方大臣よりあ

つれらる事あり

太政大臣 左大臣 右大臣 内大臣とていふ事あり

三公と申すはる事あり

左政大臣ハ剣淵の官と申す者徳の人よりあつ

上











引如と慶吉の以角沢と云法原琵琶の名人  
ありし三徳成手傳して小分小分傳るるは  
又降陽理がし一山平より此降陽理小のて録  
角沢の如くも慶大坂又坂考と加賀市と法  
原此街成乃後小江戸を立加賀市と柳川  
按按と成城市ありハ橋按按と成る高田の柳川  
ハ橋流此有人の祖く是成三徳と号三の系の名  
成此ハ降陽理三徳ハ角沢の按按成元祖と  
あり角沢の沢の字を録よして後世降陽理  
三徳成産業とすハ作は成は成成成成成成  
と云ある一ハ大坂中右の連人と成一ハ作は

於此門曰成七勝成八而写成分此作成也  
高成成成成成成成成成成成成成成成成

石井原成門又一所成書  
法成本石奉行支配成以武人由緒書

高百石 江戸志成部  
成田村内 本國成也 戸成惣成

後成院様成代安永又申年十二月成美成法成  
式成下成直成この成節成有相成成成成成成成  
成成成成成成成成成成成成成成成成

一 先祖 戸成成成成

成成成成成成成成成成成成成成成成  
成成成成成成成成成成成成成成成成



細村之内百石知行所於仕の御打紙を元和年中  
燒失仕の共長十六五年六月十三日同十七子年十  
月八日迄二十五年と云尾命名護屋御城以名恒治  
善徳丸初中の共長十八丑年正月十日後府江  
府水以用丸初中の共長十九年以用之以南地  
取洗子女之安大坂以陳之守多國宗之以日  
於仕以令之御力之可持仕を以陳中仕以安切也  
仕仕以令之江品知行所仕在江戸大坂京之介  
何仕之守之以南地以善徳丸守ハ及申仕事也  
朱下傳馬之守是南地用向丸初中以南地  
以傳馬之以南朱下以令可持仕仕在也

一玄祖父

戸波 後河

大藏院棟御代寛永二丑年一京都以不可代板倉  
周福殿之御伺之御伏之下以南地水之下又戸波  
後河跡可之守是南地以善徳丸守ハ及申仕事也  
又居年二月大坂二以南地南側以石垣同十三  
子年二月十日廿丑年同十八巳年七月以南地  
御城以石使以善徳丸御初中の寛永永年中  
安以南地水之下丸初中の心保二子年又月安  
安之寛年二月右安日也 清実以石使御  
善丸初中の明暦三子年以南地天古之御造  
樽木以善徳丸守之御定之者有石連之下將所病















所為あ九八郎此中後之知享和二年九月爰  
附之五節の事并作兵部少輔及少輔と云ふ事後  
少佐以我事あり中村と病中後也

一先組 戸波 丹後

一二件 丹後

一三件 丹後

一四件 丹後

一五件 丹後

一六件 依佐橋門

一七件 市部

一八件 奈文次

一九代 依市部

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*







可浪之得之由也

江府分御之地は清長哉と成未解是上は松  
正徳年之舟に蒙院と和解は是上は知如  
年去大は清長養清限之始及也

一文化に卯年秋清長文通前録等物惟是乃  
清長養清限之始及也

一文化に名年是行れ寸舟清長は返事は是乃  
清用白也

一文化七年

江府分御は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中

清用貴は是初中は是長は清長中  
付中川は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中

一文化七年

江府分御は是初中は是長は清長中

一葉

道弓也

江府分御は是初中は是長は清長中  
付中川は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中  
是乃為是是實件は是初中は是長は清長中







上より母新受請中地役人一月一俸大坂の所  
 のを遣り此後後其後身ととも新大工町に在る祖母  
 方より身寄り老中後出立の月付の原又とてお前  
 祖母と外に役人一流、此後後古今無比の身寄  
 御仁惠借

親類

父方

- 一 祖父 阿茶院園あむ以て了たむ在強んで道きお子
- 一 祖母 大月町 あれきまて言孫方 由る迄了孫以之
- 一 父 寛政十三年秋の海軍の甲午  
再渡り半在るは此冊紙丸御存 由んで道きお孫
- 一 母 長湯新橋町住左 由る迄了孫以之

- 一 伯母 阿茶院園あむ以て了たむ在強んで道きお子
- 一 母 大月町 あれきまて言孫方 由る迄了孫以之
- 一 母 長湯新橋町住左 由る迄了孫以之

母方

- 一 祖父 新橋町と赤坊町人 祖母村峯仁平 由る迄了孫以之
- 一 祖母 由る迄了孫以之
- 一 伯父 新橋町と赤坊町人 母より妹此所 由る迄了孫以之
- 一 伯母 新大工町住左 并此所 由る迄了孫以之
- 一 従弟 由る迄了孫以之
- 一 母 由る迄了孫以之







法成中修行不出と云と候と流しついでにれと上人  
室よりやう妻子と云つれと慈悲の殺生しし妻子を  
あつ有難き事して衣を乞へて教へし其のやを捨  
念に修行せよと宣ひて其衣を乞へて十念を授ら  
れしと云此子と云るを世上人と云りて之念はと  
修せんを樂しむ中其子と云と宣ひて一瓢を授り  
其の妻より教へし其有難き事して衣を乞へ  
一瓢して其中の修行せよと云和讃稱名と云る念  
は修行して其生を御するの如き

右宣や上人修行傳全巻之巻親三方乃心原上之ホウ  
也也其ハ海北玄雪ある由川用是る不一條ハ之内也

第は是今の空や修庵校を携へ瓢持てて中  
の因縁と

空也上人修行傳卷の中云上人村上天皇の御宇小天  
曆二年平安城と云く温病と云け屍山の事と云け  
きりあしむ同海を傾く事と云く上人と云し浅憐と云い  
て徳園半頭天皇ハ此系をまりて其衣を乞  
け清水寺にて其長一丈の一面祝言其自修りて  
車と云て自引出り此衣を乞へると云く茶を乞へて  
茶を乞へて其衣を乞へて其衣を乞へて其衣を乞へて  
の人々に其衣を乞へて其衣を乞へて其衣を乞へて  
今此衣を乞へて其衣を乞へて其衣を乞へて其衣を乞へて

也



後下氏より子より浪ち一帝す下一神農本草  
經小石生の病を治る人乃小茶あり味成あり  
りさ今温病を茶とく治る其いれり  
西して記書の夏ゆりもや自今以後元三  
層を後より先小茶成之記書に依り加護と  
是を後しんりる一と成するの一万氏は成用  
る王版と野一え之小茶湯液とるいもり  
とより宗此茶を業とる

此條庭田中條主坊師長等く是今茶を  
さく由起る六誹園立路隨筆に浪存とる

且小茶人いん小茶小用者茶人して後の一け  
と赤日納絲ことしり江戸してハ未茶小の茶茶ハ  
用れと在右してハ今小茶一茶を茶見して之版を  
由より多込の茶一その寺の列ありハ下  
雍州府志卷之四寺院門之極樂院號紫雲山在  
四條坊門為淨土尊念宗古在櫛笥通四條故稱  
櫛笥道場空也上人之記基而則安置所自刻  
之肖像此院内一老稱上人不食魚肉不携妻  
子剃髮著衣其餘十八家者不剃髮携妻子常  
製茶荃賣市朝相傳空也夜修行唱念佛巡  
洛邊磬住賣布禰于時每夜鹿來鳴上人甚



愛其聲、為閑居之友、一夜不來、嗚心恠之、翌日平  
定盛未告曰、昨夜於此、處殺鹿也、上人大驚、且悲之、  
其皮、角皮、為裘、著之、角、挿杖頭、為遺愛之物也、定盛  
亦悔之、愧之、於剃髮、為僧、今十八家、其齋而所著  
衣、定盛曾平生所著、衲衣之袍、直為衣、至今存其遺  
風也、各、衣、每夜、巡、洛外、墓所、葬場、各、以竹杖  
扣、瓢、高、聲、唱、無、常、之、頌、文、是、為、修、行、依、彌、鉢、鉢、敲  
疑、古、扣、所、携、之、鉢、近、世、以、瓢、代、之、者、乎、依、之、世、門  
前、謂、敲、所

右府志、八思川、及、祐、不、著、之、け、一、系、後、日、次、記、事、卷、に  
之、月、十三、日、空、也、上、人、光、緒、忌、の、條、に、云、れ、と、云、ある、中

あり、記、す、し、亦、及、祐、の、傳、あり、云、之、し、其、し、宗、律、あり  
小、以、之、を、之、し、平、定、盛、の、一、件、袴、何、傳、の、説、に、よ、り、と  
是、あり、と、是、又、在、世、以、瓢、挿、杖、頭、之、を、云、ん、と、之、し、に、記、す  
り、く、挿、杖、頭、に、空、也、傳、の、に、小、河、の、兒、の、瓢、を、挿、杖、頭、  
を、之、し、り、と、云、す、し、その、中、に、云、ふ、ある、は、融、通、念  
佛、縁、起、小、出、る、説、に、云、く、し、の、縁、起、ハ、應、永、年、間  
の、もの、あり、れ、ハ、い、ふ、に、瓢、を、挿、杖、頭、に、云、ふ、に、  
諸、國、寺、遊、説、云、發、可、山、西、二、所、と、り、小、河、不、極、と、り、し、  
地、河、の、住、昔、ら、小、河、也、上、人、住、む、じ、と、い、ふ、さ、る、ら、今  
小、河、に、條、坊、門、由、小、河、の、西、あり、在、崇、院、空、也、堂  
世人、傳、説、と、い、は、け、寺、の、く、く、は、い、の、茶、釜、を、刻、記、志











詩小くおちうけりやえぬ都ねしらす画しけり  
群蝶画英しらす草画のふに巻あそもの巻も  
ねまはあそびの倍の圖ありそよふ葉をさうけ  
るるの相とこつはあまはしらすさきさきや  
あし  
葉冬巻る汗振の石ふらりあそびしらす  
たる事なるまきここのまはあそびの巻  
葉冬巻る汗振の石ふらりあそびしらす

鉢扣歌

よまゝ光をこし新たのむたのむちやのキヨとけのキヨ  
あひつのごしキヨふむりのふにキヨとけのキヨ

くまをけりね風のふく時ハコヨウヨトヨ志はせ  
の風のむむさうやゆていそあまはしらす葉と家と  
もりあそびを鉢扣せりさうまうけて後生とけいそ  
ねとくはあまはしらすキヨコロレりあそびとけいそ  
わしたロイあんしらすしらすつるやう志やうしらす  
まてんしんしんしたうしらすはあまはしらす  
しらすやたんだ夜てもまめても思ふあよ唯一念ハ鉢扣ら  
るまはりあそびしらすあまはしらす  
ハイトウ葉せん

この秋室也上人の自化あるやいぬやこは白くあ  
らぬともこの秋のこいしらすしらすあまはしらす



しる也 下りの須く空也堂再建のしる也  
可くを元也俗業乞うらうけ徘徊するあり  
何れをとりて今の御所の秋ふしの秋大徳八百道  
あゝ居しるをこれと俗小秋の徳るもの作  
小く三四中ありてるるしるしる

鉢敲賛

半陶藁卷之三鉢叩賛云為真乎蓬鬢飄蕭為俗乎床衲  
勃窣非真非俗抑鹿角仙人之流亞也耶是空也上人度  
一類之機設漚和者也吁顔瓢屣空々也已没空不在斯  
乎哉

華実年浪草卷之十一空也忌の条の一鉢叩賛云晝  
不着笠夜不菌東西南北自由身一瓢扣畢有何益花發  
十方淨土春

葉の空の一鉢叩の賛詞に之集續相雲集一鉢叩  
即續一鉢叩一鉢叩固物語亦久して又つ以  
けし逸文やあらん



鶴岡山炎上事ノ記

附勸請以後興廢ノ



融通念佛縁起所載



群蝶馬坊所載茶花賣空也僧

文政辛巳八月廿一日借抄于南畝翁



鶴岡山突上事記 附勸請の巻

文政四年辛巳二月十七日取末州備倉石鶴岡八幡宮社  
火とあり同日九月九日備倉石葉谷長勝寺住持日統来りて  
年賀を乞ふ時焼亡の事始末を述べて由筆記に  
三月十七日午後三時南風吹出夜八時倍も強く夜更  
時前の落雪の事村裏の町並倒れありや藤屋も倒れ  
出火あり南風あり一々火種同所あり倒れ火移り西側  
南より北のる(官屋を焚く大勢吹くけり)ありあり時  
所中社石階の上の地樓門へ飛出り消防のるも強く  
火勢盛んりし所中社回廊系に不冷小所(供所  
本内社本意焼出に付て官舎倒れて焼ありしなり)



神樂の田原表のりるに由來ありて英勝寺に遷座意を  
社檀納をくし宝物付念致す事焼失

内陣の安造の秘封の御新に云出に他宗新由原に之當  
入長柄一揮ありて焼失事且橋の安造の隨所の像も出に  
凡石階の上の比末社社社六角堂是際堂電夜未焼失  
表河へしまるとは信十二院淨國院我是院二是院海支院信  
福院是光院香之改院莊嚴院古弟院以上九ヶ院并小の寺  
共新焼

信僧小の當りてけ物古文書亦不殘信僧の住衣近も  
焼失し之里但し古弟院に之物入昔柄一五之し并角  
納りし物もくくし之を信院へのけ物致し之故の山林

云出したるは枯草の小大移りて下殘焼亡したるもありと云  
信僧の院に焼亡して信賣坂の山林に焼入る物もまふ  
この桑も焼亡し南風が止らぬ中深く中入  
建長寺の住山觀音堂新焼亡の院の後山も移り十七日後  
夜十八日南風強く山火も消え東村不動の近東に  
武州久喜の金那金利谷村のを急近山林凡三里に焼亡  
彼建勝寺の檀方八橋とて武甲北のち中村に之が  
ありて十九日朝城の中は火く又者たきしよ人あり  
急急竹附近しを隣の山火に消滅して之くしと云  
凡石階の上の比末社に五本の急宮神殿と云二王門輪郭  
信樓藥師堂神樂のりるに由來ありて英勝寺に遷座意を



信濃の内事聖院等是院家物院并神主大伴良  
宅火災と云々

雪の中重々町先より風上る人等頼四行頼八  
行員を免るそ解申方ら残焼也

凡鶴岡山の火備へ鎌倉中十三ヶ村小保そ村毎別  
附の持場あり申社に旨の中始り所」の持場ありそ  
可くそ出火しそ燃く自宅を防ぎ居申仕信濃の  
人数無りしりし

彼長勝寺の居村名越大町村下の北若宮兼に王門  
木の持場之火勢強く吹付を免りしりし本あり  
又の爲り大突元一と云なきしとの北中社小橋りく

下北に残りしりし

茨上の越前村に中寄場所信濃諸岩山(赤澤)一丈  
かの北中(代官)大貫次左衛門没(申)ありそ後同入  
より檢使もそ一尺強り(取焼)の解持悉く所と  
十八日十九日ありのち風少して所と吹散しし中社あり  
持庭の共々も所とて終りし全銅及器具等耳  
こねしりし日納りそ取百小解きしりし

信濃九人の当分神主大伴宅兼焼残りしりし院同長  
大元ありや藤巻持も八幡の社人しりし





鎌倉八幡宮勧修以後興廢沿革

○鎌倉若門東置之中社は伊藤源頼義勧修をまゝとて安徳貞任征伐の時丹祈れ給有るに康平三年秋八月階少石清水を勧修し瑞雲と名付由比御建之

**鎌倉志**云今社之下の宮の旧地と云ふは今由井氏のこのる居の東南のふちの宮の地と云ふは今由井氏の跡と云ふは

○同云永保元年二月陸奥守源義家源康と加ふと云ふ

○同云治承四年十月七日杉原光遠小鶴岡の八幡と云ふ所を奉

同云同子十月十二日源頼朝祖家と云ふ所を奉ふ所を地



の山と延——てふ一廟を攝(鶴岡)の宮を延(小戸)と  
え茅茨の宮とあるなり

○按時始て由比々々との名々の比對の延やるといふこと  
○鶴岡と云○尤も其東鑑の文は鶴岡の言を延と  
あふふとして鎌倉志も由比北の言とし鶴岡と云ふ  
延して後にも別あること鶴岡は備へ給へ給へたるに記し  
しうきれは延延々々々々遊あふん今由比後の比と  
考ふらぬと移はるれば比形ありは鶴岡と云ふとの  
上中の言比は林御の移して後の名あり——以上東  
鑑は兼記の二章小鶴岡とあるは行やまを  
其書の日次を記して尚時と云ふ所あるは右大納言

○延延補使も補ちき——今文治二のあり記樂  
あとも其時より一を始ちたてめまより以常法承継如  
書永元暦の事、實は後と推し記したる事  
されは記事のあや自りありとも云ふなり  
○同之語承るる六月十三日鶴岡若文管見より當まは去年  
候り小庭立の舞ありしとて其舞のるは延後世に  
らるる花梅の美を記し——も——神威と貴くも  
○按延も其を若文の比り——は延神帝と祭  
まは延社也  
○小庭立と云は延新宮の謂也然も延二年  
今の上の比は延社を延——て後延下の比の若文と



管他——に徳帝の御霊を奉りて高岩宮と稱  
されし竹時君と云ふと稱するは新造のまのこは遊  
八幡の御子に徳帝とあるは其の稱之れるは右  
御事云々の文と徳令志小この高岩の修平  
御事云々——詳しむ社の御事云々——

○同之因八月廿五日鶴岡高岩宮造云々

○同之建久二年三月四日十町の邊が火災——て幕府  
諸人の高岩宮の神殿回廊焼付ぬる——火災と  
云々

按廿七申社八幡云々との按社の高岩と云ふ遊

○同之同年四月廿六日鶴岡林高岩の上の地お始て八幡宮を御

法——申ん高小宮殿を管他と云々今日と稱す

備後志云東監 五三月四日火災高岩宮の神殿及屋敷とある

とあるは建久二年三月四日と記す按三月四日火災とある

一月廿六日上條とある日數終小申日御古代變れ

管他之志あるは高岩の企あり——小祝も焼てつるは

幸——其物と傳ふれたるありん

又按竹時高岩宮三年造之——高岩社焼て——て

後その上の地の御社小造られ給ふは旧社の地也といふ

社殿を建らしむに徳帝と云ふ——是れを高岩と稱すは

事——と云ふは——高岩高岩以後建久二年の高岩の







伊代小室く三代の事候の成室竹時小室院云一と  
永代鎌倉云而一成島心一あまを果て誠おはる  
しれはありこころ

按竹時の名大に八幡宮の事云はれあり

○徳田氏弟は後元信教云亨福元年七月十九日五月十八日  
小川尚と大らう一は也自氏徳也子細く尚社と  
徳田氏事一も一も自出ら候て似堂由り

○同云天文七年十一月廿六日上宮御殿に之御殿上宮に

○同云天文九年七月廿二日一果九月遷宮延行云

○同云同十月廿一日小川尚良純死云遷宮止し也云

○同云同十月二日帝王山御所来りつら伊代遷宮云のわら由

乃云し不若かり之云

按天文元年一も一も事始九年云く一遷宮事之建行

也記天文十年二月云統る云れ二月廿二日遷宮

由る由

○寛文八年戊申一伊代再建あり云 前年寛文七年末事候

按自天文十年一氏徳再建云及百廿八年一

棟札云

上棟相及澤倉鶴岡八幡宮

仁美大將軍右大臣二位源朝臣修造

寛文八年戊申八月十五日

奉仍従五位下備前守源姓松平氏隆綱



大工

修内御所  
本原内匠孫原義永

下の宮棟札

上棟相別 深倉鶴岡八幡宮 以下同文

同時大門三筋の石多居河建之あり

○天明元年未修云後有之  
○万あると云く

○按自寛文九年正月及百禄二年

○文政四年己酉月十七日寅上  
但右云ハ云と云

○按自天明二年至今及四禄年

以上  
石井内匠元成時記

右英上事一記及此殿有亭己三月二日以攝地之理之  
書寫

且標書砌補其間云

山崎義成  
也



先祖書

内大臣平朝臣重盛嫡男  
三位中將維盛或稱代

一先祖

少将彌助重盛

遂祖維盛元暦元年辰三月廿八日紀州熊野郡  
智ノ沖ニ入ルニ名被命仕同郡有田郡保固之  
山林ニ隱居元久元年丁未六月辛未妻腹ノ男ヲ生  
兼盛トシシテ兼盛ハ度木重盛許盛致盛仲盛  
長盛美盛個盛邦盛弘盛因盛新盛海盛打盛  
保盛盈盛宗長近十九代相續上湯川村郷土ニ生  
ル也

一重盛後宗長惣領ニ由テ先因主ノ子トシテ



鹿皮執上目見仕諸没免許一有之元和中五年  
南龍院極御入國之御初る御目見仕以死事更  
定年之御信自同八戌年小沙切系中更法後  
下久之御中御立國一帝其年以御目見之  
寛永七年戊子月二病死仕信  
善盛惣取  
少和彌助敏盛

一三祖父  
石岡元録十五年壬子月二病死仕信

敏盛惣取  
少和孫助行盛

一曾祖父

石岡元文四年未八月二病死仕信

行盛惣取  
少和孫助安盛

一祖父

石岡明和四年未二月二病死仕信

安盛惣取  
少和孫助社盛

一父

石岡安永八年未九月二病死仕信

社盛惣取  
少和孫助時盛

石之通河屋住

文化五年辰五月

有田郡上湯川村地十二  
小和孫助長盛  
五



● 鎧巧明珍家譜并巧拙之評

近衛帝有 敕旨命明珍（せうしん）因為累代之家

辨称中興元祖

● 元祖

甲類上作

明珍出雲守紀宗（しんすけ）介

住雲州後移九條又任鎌倉 康治久  
安文治建久正治之頃

● 二代

甲類上手

同刑部大輔宗清

住相州鎌倉 建久正治元久之頃



右仲宗良

左内宗秀

頼母宗泰

正内吉清

平太郎吉次

同兵部太輔宗行

甲上手

住一條堀河

元久貞應寬喜之頃

大隅宗直

● 四代

同兵衛尉宗益

甲上手

住紀只和歌山

承久天福之頃

右平太宗兼

左平太宗隅

● 五代

同左京大夫宗重

甲上手

住相及小田原

寶治文永之頃

兵庫宗遠



● 六代

甲上手

任濃及佐野、弘安之頃、

同新大夫宗忠

永馬重家

嘉太郎吉重

● 七代

類上手

住九條、德治之頃、

同右近大夫宗繩

對馬宗義

● 八代

甲類中、脇當上、

同兵部大輔宗光

丹宮宗則

後醍醐帝 敕命賜御紋、製朝日威御鎧、

● 九代

甲、脇當上

同左近大夫宗政

住一條堀河、建武之頃、

將軍源義公、賜青銅拾万匹、及掛及河邊郡服部鄉、七十貫之地、



十代

同兵衛佐宗安

甲類籠手

住一条堀河 嘉慶之頃

民部大輔宗時

○右稱宗十代但不可刻姓名尚有口授

十一代

同左京大夫義弘

甲上

住一条堀河 明德之頃

十二代

同左兵衛尉義紀

甲上

住一条堀河 應永之頃

十三代

同五郎大夫義則

甲上

住一条堀河 正長之頃

十四代

同六郎大夫義長

甲上上類中

住一条堀河 宝徳之頃



弟

式部大夫高義

甲類上上籠手上作

○信家高義義通稱義類之

三作也

十五代

同新次郎義有

甲上類中

住相只鎌倉

文明之頃

久八義久

十次郎義国

十六代

同三郎大夫義保

甲上類中

住相只鎌倉

文明之頃

左近大夫義通

又四郎勝義

武田信玄令作訪星盛曾此時賜信字

十七代

同危近將監信家

甲上上類上中



住上及白井或甲及府中。永正享祿  
弘治大永天文之頃。  
○始曰安家後改信家又曰大隅後又  
号覺意入道。

新五郎信房  
孫四郎勝家

十八代

同又八郎貞家

甲中

住相及小田原或伊及。天文弘治之  
頃。○亦曰平六。

判四郎房家  
判大夫房宗

將軍神君賜御書頂戴御紋。

十九代

同父大夫宗家

一大圓平頂山尊靈甲。宗家宗信父子  
以兩作製之曰齒采御曹也。  
住江及安土。天正元和之頃。

二十代

同大隅守宗信

甲上。鑿上。尤得鍛鍊。



住大坂或武別。元和、寛永之頃。

增右衛門宗清

但馬宗長

備後宗秀

九一代

同大和守宗利

甲類、響共上。又得為彫刻。後改長門

守邦道

住武只神田

寛永、寛文之頃

木下介春信

七二代

同式部紀宗介

後改大隅守

明珍家庶流

義保弟

右近大夫義通

甲類上。且廻諸國。永勝於己者。曾

形殆似高義。尚有口授

住一条堀河。後住常列府中。或上及

大永享祿之頃



義通子 敦馬後名高義

甲類中甲形似文

義通弟

又四郎勝義

甲類上手、後号新太輔、甲形似義

通、但曾於通例小高、

住常忍府中、大永享祿之頃、

勝義子

五郎兵衛勝正

甲類中元信家之弟子也、故甲形粗

似信家

住上忍白井、或小幡、天文之頃、

太郎勝政

製作同于勝正、但勝正之弟子也、

住上忍小幡、天文之頃、

信家弟

孫四郎勝家

勝義弟子、後号重太夫、甲形似信家、  
又粗似勝義也、

住上列小幡、天文之頃、



● 信家子 貞家弟 七郎太夫氏家

甲上手似父信家

住甲列府中 大永之頃

● 勝家兄 新五郎信房

製作右同

住甲列府中 天文之頃

● 信房子 判四郎房家

甲上

住上只白井 天文之頃

● 房家弟子 判六郎房吉

製作中

住上列 天文永祿享祿之頃

● 房家弟 判大夫房宗

後号又八郎信家弟子曹形粗似信家

住相列小田原 永祿享祿之頃

● 房宗子 文五郎家房

信宗弟子甲形似房家

住相列小田原或上列 天文享祿之比



● 吉父子 九八郎信吉

製作中 信家弟子 甲形似房家

住相列小田原 天文之比

● 信吉子 文七郎信廣

住相列鎌倉 永祿之頃

● 信家子 文平房則

家房弟子

住相列小田原 天文之頃

義有庶流

● 成重子

信廣弟子

文八郎康重

住相列雪下 永祿之頃

平四郎景家

住相列鎌倉 弘治之比

● 房宗身 左内宗房

甲形、頰容似兄房宗之作

住相列雪下 永祿、天正之頃

● 義久子 次郎大夫成國

成重祖父甲中星曹多

住相列延徳之比



先成國子 平大夫成國

甲中 住相列酒白川 天文之北

成國子 成重父 八郎成道

甲上

住上列白井 元龜天文之北

義有庶流

康重父 蓬萊太郎成重

將軍源義滿公

此之記入乃云重父於其分より元平の通

甲上 曹形似義弘 星曹多 筋曹希也

曹之星稍小也

住上列八幡 天文永祿之比

成道弟子 又八郎憲國

新八 後号雲海入道 甲上 似信家作

又六郎憲重

住上列高崎 永祿之頃

又四郎重國

住上列高崎 永祿之頃



● 憲重子

九郎國重

住上列白井、永祿之頃、

● 重則子

喜六宗則

甲上勝義弟子、後改七郎大夫、甲形  
似勝義作、

● 宗則子

喜内宗義

甲上製作似父、亦似成重作、  
住上列白井、永祿之比、

● 憲三皇子

又市郎重則

住上列白井、永祿之比、

● 義通弟

兵部宗久

甲中、宗則弟子、

住一条堀河、或野州、天文之頃、

● 宗則子

三郎宗時

甲上製作似宗則、專得製類、似信家  
作、○自宗介十六代後、

住一条堀河、或上列白井、

● 宗父子

又八郎吉久



甲形似宗久。○自宗介十八代後、  
住野列太田原、或相列鎌倉、天文之  
頃、

平角久吉

右同

住野列太田原、或相列鎌倉、天文之比

貞家之弟子也 左太夫家久

甲上、製作似父、專得製嗣、

住相列雪下、天文慶長之頃、

國久子

傳七郎久家

蓋、法性丸シ 星留ニ星ノ字  
ホシニヤリト云カ

甲上、家久養子、  
住相列雪下、天正、慶長之比、

久家子

左太郎政家

甲上、

住相列雪下、慶長之比、

吉平吉道

甲形似吉久、元來吉久之弟子也、  
住奥州岩城、永祿之比、

吉道子

右近次義家

甲形似前勝義、



甲形似宗久。○自宗介十八代後。

住野列太田原。或相列鎌倉。天文之

頃。

平角久吉

右同

住野列太田原。或相列鎌倉。天文之比。

貞家之弟子也。左太夫家久。

甲上。製作似父。專得製胴。

住相列雪下。天文慶長之頃。

國久子

傳七郎久家

甲上。製作似父。專得製胴。

甲上。家久養子。

住相列雪下。天正慶長之比。

久家子

左太郎政家

甲上。

住相列雪下。慶長之比。

吉平吉道

甲形似吉久。元來吉久之弟子也。

住奥州岩城。永祿之比。

吉道子

右近次義家

甲形似前勝義。



住奥州岩城 永祿之比

平介吉貞

甲形似吉久元來吉久之弟子也  
住野刈 天文之頃

吉通之弟子也

織衛後勝義

甲形似前勝義少劣  
住奥州岩城 文祿之比

源次次清

專得製胴政家之弟子少劣政家  
住相刈雪下 元和之比

景家子

万次郎貞行

籠手上作

住相刈大鳥 元和之頃

○信家弟子

天文之比

家房

文五郎

天文之比

信行

弥介

住上刈白井

永正之比

信忠

清七郎

住甲刈府中

享祿之比

信政

九七

住上刈



● 弘治之比

任甲列

信光

● 大永之比

任甲列

信綱

丹下

● 天文之比

○ 義通弟子

信安

吉十郎

義跡

義平

義道

又太郎

上作

義正

和泉守

上作

義家

左近次

前勝義弟子

勝義

○ 成重弟子

● 永祿之比

任上列

成吉

源兵衛

成忠

門平

● 享祿之比

任上列

成次

左源次



任上列

重信

宇平

任上列

重忠

傳八

任上列

國近

平蔵子

上作

國久

蓬萊次郎

任加別或上列

上作

永久

平内

任加別金澤

國近

蓬萊三郎

面頰上作憲國弟子

● 明珍家製作之次第

● 宗介

曹形丸シテ鉢ヒキ久星大小共  
ニ有之至テシホラシク筋曹モ  
有之鉢形上ニ同シ頰烈勢至テ  
スサニシ尚有口授

● 宗清

曹形上ニ同頰父ノ作ニ似タ  
リ尚有口授

● 宗行

曹形丸久鉢形頭上尖リテ見ユ



ルナリ、頬皺十ニ、尚有口授、

● 宗益  
曹形丸ク、鉢形少シ、後高也、頬  
烈勢也、尚有口授、

● 宗重  
曹形丸、鉢形後高也、頬ハ老人  
ノ面ノ如ク、アゴ出テ長ク見ユ  
ル也、

● 宗忠  
曹ノ形、宗清ニ似タリ、

● 宗繩  
曹ノ形、丸ク、後急ニ高ク見ユル  
ナリ、

● 宗光  
曹形、丸後、少高シ、

● 宗政  
曹形、宗清ニ似タリ、筋高シ、

● 宗安  
曹形、後ニテ張、鉢ヒキク、カラク  
リホソシ、頬ヲ製スルコト上  
手也、

● 義弘  
曹形、上へ高シ、上ニテカト立、同  
庇、ヒロシ、

● 義紀  
曹形、上へ高シ、粗父ノ作ニ似タ  
リ、手除宜シ、頬モヨロシ、



● 義則

曹形上へ高シ、義紀ガ作ヨリ大  
夫ニ見ユル也、頼上手也、

● 義長

曹形上へ高シ、勝義ニ似タリ、手  
ギハ宜シ、頼專ヨシ、

● 義有

曹形右同断、

● 義保

曹形右ニ同、

● 信家

曹形ムツクリト後ニテ平ク見  
ユル也、筋ヲ上ニテ摺十カシタ

ルナリ

● 貞家

曹形右ニ同シ、信家之作ニ少シ劣リ、

● 宗家

曹形宗安ニ似タリ、後ニモ前ニ  
モ張也、

● 宗信

曹形右ニ同シ、

● 邦道

曹形大ニ丸シ、宗分ニ似タリ、

鎧巧明珍家譜并其庶流系脉且曹

製鑑定之書一帖臨摹卒業尋校正



一過畢

皆寶曆十三年癸未二月十八日

伴省祿後必

○磐齋名等空。姓加藤。播州人。父某事大神君。空幼而喪父。居京師。薙髮為浮屠氏。嘗自謂不著一宗。則和合僧也。其少時問聖學於尺五堂昌三。受台教於三井勸學院某僧正。學和歌於松永貞德。其餘神道及陰陽醫卜之術。無不窺之而已。蓋捐千金。求和漢好書。博覽強記。善作和歌。亦長和字之文。所著伊勢物語。新古今和歌集。徒然抄。抄三部。增註。其他雜說。小解。若干篇。皆行于世。其為人。不拘。小節。放曠。逸蕩也。性好遊歷。故捨



所蓄之書。而身無長物。唯一衣一鉢。從去當  
耳。東至日光山。西極長崎。凡南北東西諸州  
十有餘里之間。名山大川勝地。無不屐杖藜。  
自謂不定居於一處。則斗叢之身也。其生涯  
如是而已。來與則痛飲。夜以繼日。諧謔放縱。  
傍若無人。可謂驕兀崖異絕俗之徒也。愚竊  
曰。其所為不佛。過氏喪心狂病之遺風而已。  
嘗在京師。遊磐師之門。有年於茲。然不平師  
之所為。不欲研究其道。唯古今新會。古二集。  
源氏伊勢二物語。三部抄。徒然草等。侍師之

講筵。而窺全豹之一斑。暇日與其諸弟子相  
會。作和歌。師亦往。許可之耳。然後再見師  
於東武道館。實寬文庚戌春夏之交也。然歸西。  
未散年而寂。今而思之。泫泫然。唯其容貌辭  
氣。儼然在心目之間。哀哉。今茲修此編。故併  
傳之也。

右松井重峰仲允野語述說後編卷上





Handwritten text in vertical columns on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are faint and difficult to decipher, but appear to be organized into several columns.

Handwritten text in vertical columns on the left page, also likely bleed-through from the reverse side. The text is very faint and mostly illegible.



